

## Institute for Indian mother and Child Japan

インド人母子の会

## IIMC 活動報告

2008年8月

## インドに視察に行ってきました

3月15日から4月2日まで、インド・コルカタに行き、現地を視察してきましたので、その様子などを報告します。

実に10年ぶりのインドでした。プロジェクト自体はかなり充実してきており、その活動内容に自信を持っています。IIMCの活動の成果をじかに感じられたのは、今まで活動してきた甲斐があったと感じました。インドのような社会にあって、わずかばかりの貢献では、なかなかその成果を確認することができませんので、この感覚の意味するところは大きいと感じています。



以下に今までのIIMCの活動の歴史を振り返りながら各プロジェクトの概要を説明します。

## 医療援助

IIMCの原点は医療援助です。病気や薬に対する基本的な理解が全く十分ではないので、人々が自分たちの判断で治療をおこなうと言うこと、多くの場合、迷信的な治療方法を意味していました。そこで、IIMCは基本的な薬を的確に使用することによって、かなりの治療効果を上げることができています。IIMCの活動が地元を受け入れられたのは、緊急性のある、今ここで病気のために苦しんでいる人々を救ってきたからです。しかしながら、医学により、さまざまな病気を救おうとも、上下水道、衛生観念、熱帯特有の高温多湿に加えて、経済的な基盤の弱さがある以上、同じ病気が繰り返されます。社会全体



を変えていくための根本的な解決方法とはなりません(左の写真は、IIMCの原点とも呼べるテガリア・アウトドアクリニックを前から写したものです。最初は小さ

な小屋でしたが、少し前に建て替え、このような立派な建物になりました)。

## 教育支援

そして、IIMCでは教育に着手しました。これは、インド社会を根底から変えていくためには、不可欠なことです。文字の読み書きができない人々は、この地区では50%以上に上ります(コラム「インドの識字率」を参照)。

そのため、スポンサーシップ・プログラムに着手し、貧しい子どもたちを学校に通わせるようにしました。スポンサーは先進国に住む里親が月々の費用をIIMCに送り、そのお金で通学に必要なものを子どもに提供するプログラムです。このプログラムに賛同してくれる人々の力によって、今では2,300名をこえる子どもたちが学校に行くことができるようになってきています。

インド社会で教育を推進するに当たって、直面しなければならないことは、社会的基盤としての学校が十分に整備されていないと言うこと、そして整備されている公立学校の質そのものが低いということです。農村部に住む子どもたちが学校に通うためには、かなりの距離を移動しなければいけません。このことは、学校で勉強を継続することが難しくなります。また、公立学校では、公務員という立場の教員たちが、十分な熱意をもって教育していないということがあります。

日本において、インド社会の、特に数学の教育方法の良さがマスコミに取り上げられていますが、全貌を見渡しての報道とは思えません。どの社会にも、エリートが存在し、優秀な人間は存在します。そのような場面だけを取り上げても、実態が伝わらないと思います。

IIMCでは、教育面で貧しい状態におかれている子どもたちに支援していくためには、学校も建設していく必要があります(左の写真は、2007年初めで、幼稚園のみの学校が8校、幼稚園から小学校の学校を9校、



小学校から中高校の学校を2校、建設しました。(右の写真は、IIMCの学校のひとつであるシクシャ・サティ学校で、コルカタからかなり離れた場所にあります。近隣には公立の学校はありません。)



## マイクロ・セービング&マイクロ・クレジットプログラム

しかしながら、これでもまだ十分とは言えないと感じていました。不十分と感じた部分は、量的なものではありません。IIMCのような草の根的な活動をしている団体は量的な面で、インドの様な場所で活動していて十分と感じることはまずあり得ません。ここでのポイントは、プログラムとして、貧しい家族の基盤を包括的にサポートしていくために、不十分であるということです。これは、家族の生活を安定させることが不可欠であるということは直視しなければならない課題でした。つまり、病氣も治った、勉強もできた、しかし日々の食料はどうすればいいのであろうかという生きていくために大切な視点です。

ヒントは、インドの隣国であるバングラディッシュにありました。ムハマド・ユヌス教授が1983年に創設したグラミン銀行という方式です。マイクロクレジットと呼ばれる貧困層を対象にした無担保融資を始めたのです。2006年ムハマド・ユヌス氏は、「底辺からの経済的および社会的発展の創造に対する努力」が認められノーベル平和賞を受賞しました。本部はバングラディッシュの首都ダッカにあります。2006年5月現在、2,226の支店を持ち、バングラディッシュにある村の86%以上にあたる、72,096の村でサービスを行っています。667万人の借り主のうち97%が女性となっています。(http://ja.wikipedia.org/wiki/グラミン銀行) (右の写真は、昨年末にユヌス氏がIIMCのプロジェクトの視察に訪れたときに、IIMCの学校で記念写真を写したものです。)

IIMCでは、「マイクロ・セービング&マイクロ・クレジット

プログラム」(総称して、「マイクロ・ファイナンスプログラム」とも呼ぶ)を1997年に開始しました。

マイクロ・セービングプログラムとは、一般の銀行では見向きもしてくれないような人々を対象にして、わずかなお金を少しずつでも貯蓄できるようにしたプログラムです。わずかな金額とは、10ルピー(約3円)ぐらいからでも、預金を開始することができます。

この意義は次のような状況を考えて理解できます。たとえば、少しばかりの収入が合った場合、家に置いていたらどうなるでしょうか? 臨時収入だと思いついてしまうこともあるでしょうし、夫が使い込んでしまうという可能性もあります。また、家の鍵などのセキュリティが十分ではない場合には、盗難に遭う可能性も十分にあります。このように母親が、家族のためのお金を安全に保管しておける場所は、重要なものとなるのです。

銀行の機能もありますので、利子4%をつけています。また、通帳も発行しています。

マイクロ・クレジットプログラムとは、マイクロ・セービングプログラムに参加している母親に対して、一定の条件をクリアできれば融資を開始するプログラムです。これは、グラミン銀行と同じく無担保ですが、金利を10%取っています(次の写真が、IIMCのマイクロ・ファイナンスの支店のひとつです)。

たとえば、1000ルピー(3000円)を融資するとすると、



年間10%の金利がかかりますので、1100ルピーを返済する必要があります。年間44週で計算していますので、1100ルピー÷44週で、毎週25ルピー返済していくことになります。



昔の日本の状況を想像していただければ、理解しやすくなると思います。たとえば、仕事で収入を得るとするのは、自

### 「インドの識字率」

ユネスコの報告書によれば、インドは実に世界の文盲人口の34%を占めています。インドでは2001年現在、文盲率が34.62%。もつとも、独立した直後の1951年には識字率が18.33%に過ぎなかったことを思えば、50年間でそれが65.38%まで上昇したのだから、前進はしてきています。

もつとも、インドでは地域差が大きくなっています。一番識字率が高い、インド最南端のケララ(Kerala)州では、識字率が91%です。ケララ州の一人当たり所得は256米ドルに過ぎず、インドで最も貧しい州の一つですが、16世紀前半以来のこの地域の支配者やキリスト教宣教師(ケララ州にはキリスト教徒が多い)による教育重視の伝統と、独立後の農地改革の成功によって、社会の最底辺の人々も子供達に教育を受けさせる経費を捻出できるようになったこと、現在でもケララ州の教育予算は予算全体の37%も占めていること等が高い識字率をもたらしたようです。ケララ州の貧しさや失業率の高さは解消できていないが、ケララ州の人々は他州や中東や米国に出稼ぎに行ったり移住したりして活躍しています。

また、6歳から14歳までの2億人の子供達のうち、5,900万人が学校に行っていない。そのうち3,500万人が女子です。ちなみに、2000/2001年の小学一年生から二年生にかけてのドロップアウト率は40.67%です。1990/1991年は42.6%でしたから、ほんのちよっとしか改善されていないことになりました。

(http://blog.ohhan.net/archives/50955053.htmlからの引用、表現など一部改訂)





営業を営むことが大多数でした。私の祖父母は、第二次戦争前後、こんにゃく芋を仕入れて、こんにゃくを自宅で作り販売していました。ここで、貧しいとはどのようなことを意味するのかというと、こんにゃく芋を仕入れるお金もないのです。しかし、しっかりした見通しの元で、こんにゃく芋を仕入れるためのお金を融資してもらえば、インドの家庭にとってはまずは十分な収入が入るようになるのです。

商売としては、商品（魚、野菜）を仕入れて売ったり、機材や材料を購入して、お茶やお菓子を作って売ったり、子牛（約3000円ほど）を購入して育てて、牛乳を販売したりするようなことがあります。

しかし、むやみやたらにお金を貸しては、日本の消費者金融からもたらされる悲劇のように債務者を作り出すだけです。そこで、IIMCでは、20名ほどの母親のグループを作り、毎週集会を持ち、意見交換や運営方法などについて話し合います。この話し合いに、コミュニティ・ワーカーと呼ばれるIIMCのマイクロ・クレジットのスタッフも同席します。このようなサポートがあるから、返済率95%を達成することが可能なのです。

## 包括的な支援の成果

最初に、このマイクロ・ファイナンスプログラムを導入したのは、ホゴルクリア地区でした。この地区では、すでにすべての子どもたちが学校に通っています。そして、母親はマイクロ・セービングプログラムで自分の家計の預金を行い、マイクロ・クレジットプログラムでお金を借りて、商売して、比較的安定した収入を得ることができるようになっていきます。

ホゴルクリア地区を視察したときに、IIMCのマイクロ・ファイナンスの支店を訪れている母親たちと会いました。10年以上も前、この地区の女性たちの服装は本当に粗末なものでした。しかし、今回会った母親たちは、外出するためのおしゃれをして、十分にきれいなサリー（インドの伝統的な衣装）を身にまとっていたのです（上の写真はIIMCのマイクロ・ファイナンスに来ている母親たちです）。このサリーは、もしかしたら唯一持って

いるきれいな服かもしれません。しかし、母親たちは一から二週に一回、IIMCの支店を訪れる時に、外出を楽しむことができる余裕ができて生きているのです。

このようにIIMC活動の方針に対して、手応えを感じつつも、インドでいかなる支援団体の対象とはなっていない地域の広大さに圧倒されます。そのため、地道な活動こそが、将来につながると信じつつ、少なくともIIMCの手が届くところから、社会の根底で生活する人々の基盤を確かなものにしてきたいと考えています。今後とも、支援のほどよろしく願いいたします。

## スポンサーを受けている子供たちの生活

日本から支援を受けて学校に通うことができている子供たちに出会ってきました。すべての子供たちを訪問することはできませんでしたが、支援が必要となる子供たちの家庭の様子をお伝えしたいと思います。

## 家の状況

代表的な家の造りは、レンガの壁に、タイルの屋根をのせたものです。その程度はさまざまですが、家族の人数が多くても大体一部屋しかありません。

当然、網戸のようなものは装備していませんので、夜間蚊が出る時間帯になると、家庭訪問のときに蚊の襲来に悩まされました。蚊を媒介とする病気（マラリアやデング熱など）などを防ぐ手段まではなかなか難しいです。

また、キッチンのような場所もしっかり確保されていると言うよりは、玄関先の屋根があるところ、床で調理をしています（この写真はある家庭のキッチンの写真を撮ったものです）。

## 大きくなった姿

インド人母子の会では1994年からこの支援をはじめていますが、小さな子供がこの写真のような立派な青年に成長しています。このスナップショットは、両親とのものです。



## ノーベル平和賞受賞のユース教授

### ユース教授が IIMC を訪問

2007年12月30日に、マイクロ・クレジットとして知られるグラミン銀行を創設したユース教授が IIMC を視察に訪れてくれました。IIMC では、グラミン銀行のマイクロ・クレジット・プログラムに基づき、マイクロ・セービング&マイクロ・クレジットプログラム（別称マイクロ・クレジット銀行）を開始しています。

写真（右上）は、IIMC のマイクロ・セービング&マイクロ・クレジットプログラムがあるホゴルクリア支所の母親から歓迎の儀式を受けているところです。写真（右下）は、マイクロ・クレジット銀行の会員となった母親のトレーニングセンターのオープニング・セレモニーの風景です。ユース氏によってテープカットが行われました。



写真（左）は、IIMC のホゴルクリア・サブセンターで、ユース氏が集まった人々に対して、グラミン銀行の成功について話している風景です。

写真（右）は、IIMC のマイクロ・クレジット銀行の会員となり、事業を始めている母親と、ユース氏が話している風景です。



写真（左上）は、ユース氏と IIMC 代表の Dr. スジット・ブラモチャリが、マイクロ・クレジット銀行の展望について話し合っている風景です。写真（左下）は、ユース氏と、Dr. スジット・ブラモチャリ、IIMC 教育部門を統括しているバーナリー・ブラモチャリの記念写真です。



### IIMC の製品の販売

IIMC ではマイクロ・ファイナンス プログラムに参加している母親や、スポンサーシップ プログラムを受けている母親に対して、職業訓練をおこなっています。ミシンや編み機を使い、さまざまな布製品を作れるようになっています。そのサンプルを見てきましたので、少しずつでも輸入して、日本でも販売していきたいと考えています。まだ、検討段階ですが、一部の商品は地元の花屋さんの一部を借りて販売開始しました。今後とも検討していきたいと思っておりますが、状況だけでも報告いたします。

## 小学校 3 年生のインドの体験記

小学校 2 年生から 3 年生になる息子がインドの旅行体験を日記につけていました。

内容はほとんど食べ物なのですが、体験でインド旅行の不平や不満を書いていないのは、親としてほっとしています。

小中学生の子供を連れて旅行する家族も少ないのもひとつの理由でしょうが、日本人の

子供たちを現地の人たちは非常に暖かく迎えてくれました。貴重な体験になったと信じたいですね。

この「悠介旅行記（はじめてのインド）」は、インド人母子の会のホームページで読むこともできますし、冊子状にしたものを一括してダウンロードして、印刷して読むこともできます。インド人母子の会のホームページは、<http://iimcj.eccl.net/> です。



### インド人母子の会のホームページ

デジカメの時代になり、フィルム代と現像代を気にしないで思う存分写真を撮ることができました。それでも、説明をつけないとよく分からないと思いますので、説明をつけながら少しずつインド人母子の会のホームページに掲載して行く予定にしております。パソコンまたは携帯からインターネットへアクセスできる方は、見てください。インド人母子の会のホームページのアドレスは、<http://iimcj.eccl.net/> です。



### さいごに

今回の視察の結果につきましては、また報告いたします。今後ともご支援のほどよろしくお祈いします。

IIMC 活動報告 2008 年 6 月発行 ID200811  
発行：インド人母子の会 代表 国重 浩一